

令和3年度 第1回 弘前市総合教育会議 会議録

日時 令和4年1月26日(水)
午後3時

場所 岩木庁舎2階 多目的ホール

◇議事日程

- 1 開会
- 2 市長挨拶
- 3 議事
 - ・協議事項 「教育行政について」
 - (1) 学校における体験活動の充実について
 - (2) 子どもの心身の健康について
- 4 閉会

◇出席者

弘前市長 櫻田 宏、教育長 吉田 健、教育長職務代理者 日景 弥生、
教育委員 齋藤 由紀子、教育委員 村谷 要

◇欠席者

教育委員 柿崎 良樹

◇司会及び説明のため出席した者の職氏名

教育部長 鳴海 誠、学校教育推進監 横山 晴彦、学務健康課長 相馬 隆範、
学校指導課長 鈴木 一哉

◇その他出席した者の職指名

教育総務課長 菅野 洋、学校整備課長 高山 知己、
教育センター所長 小笠原 恭史、生涯学習課長 原 直美、
中央公民館長 中川 元伸、博物館長兼高岡の森弘前藩歴史館長 石岡 博之、
文化財課長 小山内 一仁

午後3時6分 開会

○市長(櫻田 宏)

令和3年度弘前市総合教育会議の開催にあたり、ご挨拶を申し上げます。皆様には、日頃から教育行政はもとより、市政各般にわたり、格別のご理解とご協力を賜り、深く感謝を申し上げます。

本会議は、教育委員会と、教育のあるべき姿や課題を共有し、連携を強化しながら、

教育行政の推進を図ることを目的に開催するものであります。

現在、市では、これからの人口減少や少子高齢化社会に対応しながら、市民協働の理念に基づく、持続可能なまちづくりを進めるため、地域を担う人材の育成を進めているところであります。昨年度は、GIGAスクール構想の実現に向け、市立小・中学校の児童生徒全員に対するコンピュータ端末の1人1台の配備と、学校内の高速大容量通信ネットワークの一体的な整備を完了いたしました。

今年度は、それらを活用し、子どもたちの学習活動を一層充実させるため、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を進めているところであります。

本日の会議では、「学校における体験活動の充実について」と「子どもの心身の健康について」の、二つのテーマを設けました。次の時代を担う子どもたちの教育について、皆様と率直に意見を交換したいと考えております。

限られた時間ではありますが、実りの多い意見交換となりますよう、ご協力をお願い申し上げます。

○市長（櫻田 宏）

それでは、議事に入りたいと思います。協議事項は、「教育行政について」であります。今回は二つのテーマを設定して進めたいと思います。一つ目は「学校における体験活動の充実について」、二つ目は「子どもの心身の健康について」であります。まずは、「学校における体験活動の充実について」、事務局から説明をお願いします。

○学校指導課長（鈴木一哉）

資料に沿ってご説明いたします。小・中学校における体験活動の充実につきましては、以前より学習指導要領に示されており、これまでも各学校の創意工夫のもと実施されてきております。令和4年度、教育委員会では学校における体験活動の趣旨について、3点に整理し、重点的に取り組んでいく予定としております。（1）異年齢の仲間や地域の人々との交流を積極的に推進し、様々な体験活動を充実させること、（2）体験活動を通して、郷土弘前の魅力の発見を促すこと、（3）体験活動を通して、キャリア発達を支援すること。また、体験活動の教育的意義については、2.の四角囲みに記載の内容を再認識し、重点化の土台とする予定です。3.にあります、体験活動例の具体的な活動や、例以外の活動を掘り起こしながら、「未来をつくる子ども育成事業」で各学校に取組を促していきたいと考えております。教育委員会としましては、児童生徒が広く弘前市内の「ひと・もの・こと」とつながり、関わりが広がるよう、各学校における体験活動について、その意義や内容を再確認、整理しながら柔軟に見直しを図るなどし、より一層の充実を図ってまいりたいと思います。

説明は以上です。

○市長（櫻田 宏）

弘前は、自然環境や文化財、伝統産業など魅力ある地域資源が豊富だと思っております。

す。子どもたちが直接触れる機会を積極的に作り出して、子どもたちの郷土に対する理解を深めて、さらには子どもたちの主体性を伸ばしていくといったことが非常に重要であると思っております。そういうことが次の時代を担う人の育成につながっていくと思っております。まず、この「学校における体験活動の充実について」、忌憚のないご意見をいただきたいと思えます。

○教育長（吉田 健）

まず、なぜ体験活動が重要かということを確認しておく必要があるかと思えます。ここ10年くらい前から大きな教育改革が進んでおりまして、例えば今回の大学共通テストの問題の質が大きく変わりました。それはどういったことかということ、これまでの勉強は、知識とか、そういうものを吸収していれば何とかかなった時代ではもうなくて、どちらかということ主体性であるとか、思考力、判断力、表現力、人との関わり、多様性とかそういうのが注目されています。そういった中で生きていくためには、教科書を勉強するだけでは身に付かない。それでやはり体験活動を充実させなければならないといった、国の大きな方針から出てきたものだと思います。50年後の将来には、50%の職業が消えてなくなるというような研究データもあるといわれていますけれども、そういった時代に生きる子どもたちですから、やはり「生きる力」、簡単に言うとそうですけれども、身に付けるためには体験活動が重要なのかと考えます。

私は弘前に生まれて育ったわけですが、40年ぶりに弘前の市民に戻ったときに改めて感じたのが、やはり弘前というのは文化財にしろ、ものすごく教育資源が豊富で、これを活用しない手はない、津軽塗をはじめ、いろいろな職業というのが豊富であると。こういったことを小さいうちから子どもたちに体験させることが将来弘前を担ってくれる子どもたちに、ぜひ必要なんではないかなということ、体験活動というものを注目していたわけです。その中で、私が一つ思っているのは、文化財とか大学があるのを活用すること、それから職業を学ぶという、この二つの観点が必要なこと、取り組みやすいこと、というふうに考えています。いろいろな方のご意見とかを伺って、子どもたちにいろいろな知識というか体験活動を経験させてもらいたいなと思っております。

○教育長職務代理者（日景弥生）

これ学校教育におけるですよね。それで基本的なのは、もっと体験活動を充実ということは、量的な回数を増やすだけではなくて、質的な向上という両方の側面があるのではないかなと思うんですね。それと関わるころってというのは、多分に学校における教育環境の整備なんではないかと思っているんです。例えば、連れて行きたいけれど先生たちに余裕がない。というのは、時間的な問題ってということがあると思えます。それから一部に言われているのは、先生たちが比較的年齢が高くなっているということがあって、体力的な問題があるっていうふうなことも言われているところです。それから資金といいますか、例えばバスを借りたりとかというふうになると、そういう金銭面での環境整備というのもあるかなというふうに思ってるんですね。特に先生たちの時

間に関しては、今、働き方改革がいわれている中で、なかなか厳しい面もありますが、あわせて学習指導要領そのものも時間数が増えていて、先生たちの負担増が確実にあらわれてるんですね。ですからそんなところをうまく勘案しながら充実をさせると考えたときに、私はここに行けばよいんじゃないかというのは何とも言えないところはあるんですが、言い換えると、今、どこどこかに行って、何の目的で行ってというところをちゃんと洗い出したあとで、教科に関わるところ、それから教科以外に関わるところで、この学校では、何を子どもたちに、どういう力を付けたいのか、その力を付けるための手段として体験学習がある、というふうに思うんですね。だから、各学校でその辺の洗い出しをしていくというところが一番最初かな、というふうに思っています。それをやると、より具体的にどういうふうにしていったらよいかというのが見えてくるんじゃないかなと思います。

○教育委員（村谷 要）

私、教育委員4年目ですけど、いろいろ体験学習に関してもですね、今まで見てきた中で、日景委員からもお話ありましたとおり、バスとか、そういう集団で移動するときの予算も含め、移動手段はなかなか難しいということをお話しております。授業の中で出てくるものをどうピックアップするかというのはすごく大事なところで、地域の資源がこういうものがあるというのはもう既にされてますので、そういったものを使ってですね、どんどん授業の中に、単年度・単発でなくて、継続的に学年ごとに変わっていくような、そういうスキームを作る必要はあるんだろうなと。点では非常にたくさんやられているのは拝見してます。それが面になって、立体になるようなつながりを、そのあとに進んでいけるような、そういった仕組みができれば、もう既に点で動いてますので、割とスムーズにそういったところは動くんじゃないかなと思います。また、各学校、市内といっても広いので、大森勝山とか遠いですし、いろいろな場所、点在してますけれども、それぞれの学校の周辺にもそういった文化財、伝統工芸含め、そういったところからも既にやられてる学校もたくさん見受けられます。それをどういうふうな形で学年ごとに1年のときにここ見て、じゃ2年のときにどういうステップで同じものを見ていくか、であったりという仕組みづくりさえできればなど。あとは、教育委員会含め行政のほうで、交通手段とかそういった部分は予算含め、きちんと組むという形を作ればですね、バスの予約が取れない、予算がないとかではなくて、毎年その積み重ねをですね、きちんと仕組みとして作っていく、それさえ動けば、体験学習は有効な形で動いていくと思います。伝統産業に関しても、実は弘前は街の中に職人さんが、鍛冶屋さん、津軽塗、木工含め、様々街の中に溶け込んでいます。私も鍛冶屋さんなんかに行くと見かけるのが、小学生の子どもたちがガラス越しにじっと見てたりするんですね、作業してるのを面白そうに。そういう環境があるので、もう少し仕組みとして組み込んであげれば、学校として見に行けるような、環境づくりというのをしてあげればですね、あるいはもう学校に来ていただいてっていう形のことを点ではもうやって、各分野で動いてますので、そういう形の動ける仕組みさえあればよいかというふうに思いました。

○市長（櫻田 宏）

私も鍛冶屋を見に行って1時間以上いたような気がします。ずっとはまってしまうというか。なぜこの鉄くずの山があるのかという、映画のセットのようなものが街の中にあるわけですからね。それを見ながら子どもたちがいろいろなものを感じていく、そういう場に行くためには仕組みを作っていくという。

○教育委員（村谷 要）

鍛冶屋さんのお話で思い出したんですけど、実は私市内のある鍛冶屋さんところでマイ包丁が作りたくて弟子入りしてたことがあるんですけども、そのときに鍛冶さんと話をしている、市の文化財のほうともお話をしている、実は弘前のこのエリアっていうのは1300年くらい前から鉄の文化っていうのがずっと続いてきている。製鉄炉の遺跡もあり、それが埋蔵文化財のほうで保管されている場所があるというので、そちらのほうにもお邪魔して、鍛冶屋さんと一緒に連れて行って、お話を聞いたときにですね、鍛冶さんが埋蔵文化財の鉄くずとかいろいろなものを見て、先週うちの工場で炉を掃除したら、これと同じようなものが出てきている。道具なんかも遺跡を見ると、形は変わっているけれども基本、製鉄の作業っていうのは単純なので、工程っていうのはそんなに変わっていない、道具もそんなに進化していない、そういう比較っていうのがすごくできる。そういうのを子どもたちが見ていけるような環境っていうのがあってもよいよねというのが、埋蔵文化財の方とお話しながら、これを見せるというところを作りたいよねというお話をさせていただいたので、そういうのを一個一個つないであげられれば、面白いなと思いますね。

○市長（櫻田 宏）

今あるものが、実は1000年以上前にも同じようなものがあったということで、歴史を生で体験して、今あるものがそうすると1000年経つとどういような発見をされるかという。

○教育委員（村谷 要）

そうです、そういう話もしました。その鍛冶さんの今の敷地、1000年くらいしたら遺跡になって出てくるんじゃないかと。

○教育長（吉田 健）

そういうの弘前ならではですよ。近所を歩くと当たり前にあるものなんですけど、気付いてないんですよ、そういったところを掘り起こすというのもすごく大事かと思っていますね。

○市長（櫻田 宏）

歴史というと教科書で学ぶものということになるんでしょうけれども、結構身近なところにもたくさん歴史が転がってあるわけですので、それに気付くかどうかというところが、これから私たちが環境整備していくところなんでしょうね。子どもたちはすごい興味を持っているものがたくさんあると思うんですよ。

○教育委員（村谷 要）

もう一つ、私は市長、教育長と同世代ですけど、中学校の時にブナコ製作体験やったじゃないですか。

○市長（櫻田 宏）

ああ、ブナコ製作体験、やりましたね。

○教育委員（村谷 要）

実際に学校で作る体験をして、今になるとブナコさんの商品見てもどう作られている、どういうふうにできている、というのがすぐにわかるんですよ。

○教育長（吉田 健）

私、中学校の裏にブナコがあったものですから、みんなどこでもブナコやってるのかと思ったら、ブナコのことを知らない方が意外と多かった。ブナコも今は洒落た形のもので作られてるようですけども。

○教育委員（村谷 要）

でも見れば、製造工程全部わかりますもんね。そういう体験が今の子どもたちもできていければなど。

○市長（櫻田 宏）

学校の現場で、職業を見に行く、体験しに行くというよりも、もっと身近に体験できるものがある。そういうものを学校環境の中に組み込んでいけるようになっていくと、日景委員が話されたような先生方の負担も大分減らしていけるのではないかなと。

○教育長（吉田 健）

協力を得られれば、そういったものいっぱいありますので。いろいろ話をしてみるとそういう方っていうのは協力したいんですよ。だけど、どうやったらよいのかっていう、その辺のところをうまく教育委員会なりが調整できればもっと資源を生かせるのかもしれないですね。

○市長（櫻田 宏）

保護者の立場からだ、どうなんですかね。

○教育委員（齋藤由紀子）

今現在、子どもを育てておりまして、市には大変お世話になっております。体験ということで、今のコロナ禍で中止になったものも多いんですけども、上の子ども含めて振り返りますと、学校で金魚ねぷたづくりをさせてもらって、それを弘南鉄道の電車内に飾らせていただいたり、津軽塗のお椀とかを作らせていただいたり、いろいろな体験をさせていただきました。各班に分かれて土手町を探索する街探検とかもありまして、歴史ある薬局、ホテルのお仕事などいろいろ見せていただきました。今はそういうことが難しい状況ではありますが、これからも引き続き体験活動というのは親としてさせていただきたいと思っておりますし、これからも感染症とか、災害というものも必ず起こるというふうに想定した上で計画を立てて、なるべく実行できるように進めていくことが必要ではないかなというふうに思いました。そして弘前には、身近な場所に歴史館ですとか、博物館、プラネタリウムなどいろいろなよいものがたくさんあります。残念なことにも一度も行ったことがないというお子さんもいらっしゃるし、またはどこにあるのかってというのがわからないという親御さんがいらっしゃるのも事実ですので、例えばバスで行く遠足や、社会見学の中に一つ組み込むとかして、できればたくさん見せてあげたいなというふうに思います。

○市長（櫻田 宏）

いろいろな体験をする機会はあるんですけども、意外と知らない。親が知らないと連れて行ってあげられないという、そのまま経過してしまうというのはありますよね。自分でも子どもが小さいときにいろいろ連れて行かないきゃいけないと思うものの、さあどこにといったときに悩んでしまう。そういうときに、こういうのがありますよという情報提供があればちょっと行ってみようかなとなる。

○教育長（吉田 健）

自分で行ったことがあるんだったら子どもにも勧めて、あそこに行こうとか言えるので、今の子どもたちが大きくなったときに、そういう大人になってもらうっていうのも大事なことだと思いますね。歴史はどんどんそのまま残っていますので。

○市長（櫻田 宏）

こういうふうに考えると、親が地域のことを知っているようで、実は知らないのかもしれないなというところを含めて、親子で一緒に参加していただくようなプログラムがあると、親の立場からすると助かるのではないですかね。自分で知らないと子どもを連れていけない。そういうことで子供と一緒に初めて見るもの、体験するものというのがあってもよいのかな。すると親の精神的な負担も減るし、また子どもが興味を持った様子を親が直接こう見られるというか、学校で行ってきましたよといっても、子どもが家に帰ってきて話をしてくれても、実際の現場を見てないので、どのぐらい喜んでいたの

かわからないというのもあるかなと。そういう意味でいうと、一緒に行っていると子どもたち同士でこんなに盛り上がっていたというのも直接見られますし。そういうのもこれから地域を知る機会というのがあるけれどもよいかない感じがしますね。

○教育長（吉田 健）

親も巻き込むというのは大事なことだと思います。

○教育長職務代理人（日景弥生）

すごくよいと思うんですけど、現実的に保護者の方ってほとんど働いてらっしゃいますよね。だから学校でとなってくるとかなりハードル高いように思うんですよね。例えば授業参観だったり、うちの子どもたちのときは親子レクリエーションというのもあったような気がするんですけど、そこへの参加者そのものが、おそらくかなり減っているのではないかと思います、どうなんでしょうか。

○教育委員（齋藤由紀子）

今は、中止しているような状態ですけれども、少なくはないですね。

○市長（櫻田 宏）

学校のほうでもかなり企画されているのではありませんか。

○教育長（吉田 健）

そうですね、ただやはりそんなに活発かという、一部には熱心なお母さん、お父さん方もいらっしゃるんですけど、そうでない方で両方とも働いているとなると、参加できないという面もありますよね。親子で行く機会であって子どもが喜ぶものという何か情報流してあげれば、参加してもらえれるのかなとか、いろいろなことをやっていかなければならないと思うんですよ。先ほど、齋藤委員が言われてましたけれども、遠足とか校外学習とそういうふうなカリキュラムで決まった時間でやるのもそうなんですけど、私がイメージしているのは、1時間だと移動するだけで終わりなので、授業時間2時間ぐらいを連続にして、例えば、あらかじめ博物館を調べておいた上で、実際に博物館に行って、見て、それをレポートにまとめる。そうなる学校行事ではなくて、地域の歴史を学ぶという歴史の時間になるわけですね。そういうような形で、時間数が多いから体験学習が要らないではなくて、歴史を学ぶときに体験学習がイコール学校で学ぶ授業。学校におけるというのは、必ずしも学校の教室でやるということではなくて、学校教育の中で行われるものという意味で、弘前の街全体が大きい教室なんだというイメージですね。そのほか、先ほどのお話にもあったように、バスで移動するとバス代が必要とか、義務教育ですからなかなか一律に高校みたいにお金を集めることもできないですけど、市が所有しているバスというのものもあるわけですから、そんなに数は多くないですけども、小さいクラス単位でも、1時間、2時間の単位でも、授業の中で行ってすぐ

帰ってきて、レポートをまとめて、発表する、ということをやるとそれが国で示す学力の方向性にもつながるんじゃないかと思います。また、近所にある資源というのにおいても、まだまだ私の知らないようなものがたくさんあると思いますので、掘り起こしとか、協力とか、いろいろお願いすることがあるという気がします。ただ一律に、弘前の小学生、中学生だから必ずみんな同じことをやらないといけないという発想はもうやめたほうがよいと思います。ある学校はりんごを中心にやったり、ある学校は米づくりだったり、またある学校は城について研究をするとか、そういうふうに小学校で同じことをやらなかった者同士が、中学校に行ったら互いに何やったのか聞き合ったりする。やった内容ではなくて、やった経験が生きてくるんですね。これが高校になって、大学になって研究者を目指す人も、歴史学者になる人も将来いるかもしれないし、何の職業についてもそれが生きるというような形になればよいのかなというふうに感じます。

○市長（櫻田 宏）

子どもたちの多様性、好奇心というのはどこに出てくるのかわからないものですが、今ある学校の周りにもたくさんのものであって、それぞれの地域の特性があります。その地域の特性を、まずは自分の身近なところを知ろうという機会があってもよいのかなということですよ。それが全部の子どもたち一律でなくてもよくて、地域の特性ということですので、でもそれを青森県全体で考えれば、青森県の特性を結果的に学んでることになるわけですから、そういうのも学校の中に入っていければよいのかもしれないですね。ただ、先生方に大分負担かかることになるようではありますけれども、観光関係によって掘り起こし部分はかなりやられています。物産関係においても、かなり掘り起こしをやっているんですね。先ほどの鍛冶屋さんの話も、掘り起こしの中で、1時間黙って見ていられるというくらい興味深いものを発見して、以来私たちはそういう機会があれば、鍛冶屋の面白さというのを発言しているわけです。そういった点が市内にはたくさんあるので、それらの歴史を生かしながら、さらにこれから先につなげていくためにはもっと興味を持ってくれる人を増やす、増えるような機会を作る。それによって新たな担い手になっていく可能性も出てくる。それが子どもたちにとっての多様性というところで、それぞれの興味を持ったものに向かって行っていただけるのかなというような感じもしますね。

○教育委員（村谷 要）

今お話があったとおり、弘前ってフィールドにあらゆる分野が残っている。全国に多分ここぐらいだろうなというくらい、伝統工芸に関して言うとあらゆる分野が本当に残っています。城下町ができて、日本中から職人を集めて、今も続いている。もう少ししたら消えてしまうものも出てくる可能性がありますけれども、まだ残っています。そういったものを教育委員会だけでなく、行政、商工、あるいは国とか県で残していきながら、財産として教育のほうに活用するというのはすごく大事なことになると思いますので、そういう連携もぜひしていただければなと思います。今、観光とも言わ

れましたけれども、まさに文化財含め、それはもう観光と連携すべきですし、伝統工芸なら商工というふうに、あらゆる分野で連携して動いていく。そういう体制づくりは、当然市長は目指していると思いますので、そういう仕組みを作ればなと思います。

○市長（櫻田 宏）

弘前市内にも相当あるんですけども、津軽地域というところに視点を広げると、今、津軽地域 14 市町村でDMOという観光の新しい方向性を探ろうという組織を立てて、それぞれの地域、市町村にある、魅力の掘り起こしというのをやっています。その結果をもらって、教育委員会としてどうするか、どう使えるかという話をしてもらおうと、先生たちの負担もまた減っていくのではないのでしょうか。一からやれというとなかなか大変な作業になるので、今までいろいろと行われてきたものをどう活用していくかというところが出てくるのかなと思います。

○教育委員（村谷 要）

先生に預けるんじゃなくて、地域から協力を集めて動かすっていうのが、やはり大事だと思います。先ほど教育長も言われていましたけれども、そういうことに協力したいという企業さんも結構あって、皆さんそういう前向きな姿勢はあるんですが、ただ接点が見当たらないということだと思いますね。そういった人たちとの連携とか、ネットワークの構築っていうのが大事だと思います。

○教育長（吉田 健）

学校の先生に、一から十までやってくださいということではなくて、教育委員会側からもある程度、こういうのはどうかという提案をしたりとか、その一方で、学校側からはやはりこういうのをやりたいという、生徒だけではなくて先生方の主体性も引き出せるような話合いを持つという形を作っていく。また、全部先生方の負担ではなくて、例えば、当日そこに行ったら教育委員会の職員が説明をするとか、地域の方とか、ボランティアの方をお願いして、解説してもらおうとか、作業のお手伝いをしてもらおうとか、そういうところについて、少しお手伝いができればとは思っていますね。一日いっぱいかかるようなものをやろうとすると大変なので、本当にできるところからというような形でやれば、それでうまくいった事例を蓄積して、それを発表してくれるとか、共有してくれる学校とかあるとよいんですけども。活動している学校は結構あるんですけども、やはりで単発で終わっているような気はしますね。

○市長（櫻田 宏）

例えば、弘前城の石垣の積み直し、あれは学校で見に行ってるんですけどか。

○文化財課長（小山内一仁）

石垣の解体のときは、市内の全部の学校、文化庁の補助事業を使って見学しました。

まだ文化庁からは内示等来ていないんですが、現在縄文遺跡群の改修をやっていることでもありますので、これらも含めて、大森勝山遺跡とか堀越城跡とかについて、史跡の公開活用事業という補助事業を使って、来年度において、史跡の見学会みたいなことをやれないかということで補助申請をしております。

○市長（櫻田 宏）

弘前城菊と紅葉まつりのとき、縄文遺跡群の説明をしているところがあったんですけども、そこにたくさんの子どもが集まっていたのを私見えています。それから、広域の市町村長の会議のときに、石垣の積み直しをしている現場での説明があったんですけども、首長さんたちがとても興味津々で見てくれていたのを見えています。大人でもそうなので、子どもはもっとそういうのあるのかなど。今しか見られないものというのはやはり旬のうちに見せたり、体験させておかないといけない。解体のときに見た子どもたちと、今、積み直しをするときの子どもたちというのは、同じだったり違ったりするのでしょうか、偶然両方見た子どもたちもいるかもしれませんが、そこに行って、現場の人たちがいて説明もしてくれるとなると、先生方の負担も少なくなるでしょうし、新たな発見もさせてくれるのかなど。今あるものをどう生かしていくかということも、これからの大きな課題かなというふうに考えさせられました。

○教育長（吉田 健）

こちらからの提案も大事なんですけれども、子どもたちのほうから、これやりたい、あれやりたいというのを引き出すっていうのがすごく大事だと思っています。今、端末が全部に回りましたので、それを教室では活用しているわけですが、もうそれも、文化財見学に行ったらそれ使って、観察や見学を画像で記録したり、説明とかコメントを録音したり、動画で撮ったり、そういう活用をさせると。子どもたちは、興味を持ったものは、どんどんやりますので。先生方にはあまり、ああしてはダメ、こうしてはダメと言ってもらいより、じっと子どもたちの熱意を見守るように、何をやりたいのか、興味・関心をうまく引き出せるようにと。日景委員が言われたように、先生方の負担ということも無視できないものですから。そのところをうまくやるのが、大事なことだなというふうに思いますね。

○市長（櫻田 宏）

もう 25 年前、日景委員とひろさき未来創生塾を立ち上げたときの話ですが、アドバイザー側からはこういうのやりましょうよというのを一切言わないで、塾生たちにいろいろ考えさせたり、議論させた中から、こういうことをやっていきたいよ、というのを生み出すのに、まあ 1 年はかかりましたよね。でも何か今はそういう感じなんですかね。

○教育長職務代理人（日景弥生）

中学生ぐらいだったらできるかもしれませんが、小学校だと高学年で、先生のサポ

ートがあればあるいは可能かもしれないですね。私が思っているのは、教育行政としては、こんなことをやったらこういうことがうまくいったとか、事例を集めたデータベースのようなもので、情報を市内の先生たちと共有できるようにすると、とてもよいのではないかと思います。今までの体験活動は、私が子どもの頃にやっていたのとそれ程変わらないもののように思うんです。それにも大事なところもあるとは思いますが、今の子どもたちの興味・関心も変わってきている、あるいは変わっていくものですので、それにある程度対応できるような体験活動も必要なんじゃないかと思っています。ですから、市内の小・中学校、あるいは場合によっては他県でもよいかもしれません。何か面白い、そういう何か提供できるようなものがあるとよいかなと思っていますね。

○市長（櫻田 宏）

齋藤委員は、何かこういう体験があればというのはありますか。

○教育委員（齋藤由紀子）

そうですね、先ほども言いましたけれども職業体験をたくさんさせたいというふうに思います。弘前にはたくさんの職業がありますけれども、今の子どもたちが知っている職業はごく限られていると思いますので。実際にやってみることができれば一番よいですけれども、全部ができるわけではないので、見学だけでもとは思いますが。また、たくさん職業を学んで、その中で自分にはこういうのが合うんじゃないかというふうに、子どもには感じてもらえればなと考えています。

○市長（櫻田 宏）

弘前市内にどういう職業があるか知らないまま育っていつているという。

○教育委員（齋藤由紀子）

親の私もすべて知っているわけではないので、親も知りたいですし、それを子どもと共有して、こういう仕事があって、こういう苦勞があって、でもこういうふうに役立っているというふうに学んでほしいです。たくさん知って、体験して、選んでほしいなと思いますね。

○市長（櫻田 宏）

地元の企業が言うには、求人を出しても人が来ない、ほぼ首都圏のほうに行ってしまうという話なんですね。地元でどういう職業があるか、仕事があるかということを知らないまま成長してしまうといざ高校卒業の頃に、進学か就職か、就職するならどこに行く、の選択の仕方になってしまっているのかなと。それ以前に、もっと子どもたちが興味を示すようなものが職業としてあるんだよということを知る機会、興味を持てるような機会を作っていくということですけど、非常に重要だと思いました。

○教育長（吉田 健）

親が子どもの授業の様子を見に行く参観日と逆に、子どもたちが自分の親の職場を見学する取組というのをいろいろなところでやっていると言われていて、そういうのも身近な取組の一つだろうと思います。弘前は、この津軽塗とか伝統工芸などの弘前ならではの体験というのがありますし、そうでなくても、他にもあるような建設業でも、農業でも、それぞれの職業にはどういうふうな苦労があるのかとか、それもすべての学校で同じくやるのではなくて、いろいろなものを調べて、それを発表する場を大事にする。それが表現力とか、人と関わる力とかが付きまします。そういう発表の場とか作ってやれば、口で喋らなくても、画像、動画を使ったレポートとか、今の子どもたちはパソコン得意ですし、学校の中にも必ず詳しい先生がいますので、一枚のポスターにまとめてコンクールで競わせるとか、そういったことも面白いと思いますね。

○市長（櫻田 宏）

この間、弘南鉄道の平賀駅で鉄道の車輪、鉄製のタイヤの交換をする作業の様子が公開されるという機会があって、視察してきたんですけども、そのときちょうど、三中の生徒さんが別の体験で来てまして、ブレーキシューの交換をしていると言うんですよ。大変でしょうと話しかけたら、いや楽しいって答えるんです。生徒同士、互いに、ここはこうだとか、こう外さなきゃだめなんだと言いながら、結構長い時間、一生懸命やってる様子でした。また、駅の人にもお話を伺うと、今、日本に鉄道の高校というのが、2校あって、そのうちの1校が修学旅行で来ていたと言います。弘南鉄道の技術を見に来たんですよ。その高校は最新鋭の鉄道車両を使用して、生徒がいろいろなことを学んでいるんですけども、弘南鉄道には原理原則があるんですよ。コンピュータ制御のないアナログな旋盤があったりとか、焼き嵌めといって接着剤とかボルトとかを使わないで、鉄製のタイヤをバーナーで熱して、熱膨張を利用して、車軸にはめ込むという昔から継承されている技法を、修学旅行で見に来ていたんですね。そういうものが身近にあったんだと思いました。昭和40年代製の大きい機械なんですよ。それがものとしては、時代というか歴史教育にもなっている。他にも、いろいろな見方からすれば、地域には面白いものももっと転がっているかもしれない。さっきの打ち刃物の話もそうですけれども、津軽塗も多分そうなんですよ。なぜこの津軽塗の塗師たちを連れてきたかという。殖産のために連れてきたとか。いろいろ歴史を紐解くと起源や原点というのが必ずあって、それが今に続いて、職業にもなっている。身近に興味を持った中にも、将来その職業にという意識みたいなのが生まれてくるのであれば、地元弘前、地域を担ってくれる若い人たちが育っていくのかなと。

○教育委員（村谷 要）

どんなハイテクであっても原点はローテクなわけですから、平賀駅に来た高校生は、多分原点が見えた面白さってあったと思いますね。

○教育長（吉田 健）

原点大事ですね。原点がわかってこそその発達でしょうから。それが弘前、弘前周辺に残ってるということですよ。

○市長（櫻田 宏）

残ってる、あるんですよ。今あるものを出していくのであれば、それほど負担にならないで、でも子どもたちの興味を持つものがたくさん出てきます。その姿を親も一緒に見ていくことによって、ここでこういう職業がある、地元においてこういう職業をすればどうっていう意識になっていくのかなと感じますね。

○教育長（吉田 健）

学校教育だけでなく、社会教育にもですね。

○市長（櫻田 宏）

社会教育の現場もそうです。もっと言えば社会教育という位置付けだけでなく、地域の方々と触れ合う機会というふうにもつながっていくのかなと思っています。その橋渡し役が私たちであると。

話していると盛り上がってしまうもので、一つ目のテーマで時間が大分経ってしまったようです。二つ目のテーマについては、この次の機会に改めて話合いをしたいと思いますが。

（一同異議なし）

○市長（櫻田 宏）

ひろさき未来創生塾で進めたあの時の手法というのは、アドバイザー側からはあれをしなさいというのを一切言わないものですから、塾生たちは何をしたらよいのかって悩みに悩んで、半年間ほどは悩んでいましたか、中には落としどころがあれば合わせますからと言い出すメンバーもいたほどでしたが、いや落としどころはない、皆さんがやりたいことを自由にやってほしい2年間です。ただ、1年目が終わると中間発表会がありますよ、とだけ伝えたんですが、そうするうちに塾生の皆さんもだんだんと方向性が見えてきて、自分たちが興味を持ったものをやりましようとなりました。そのときに一番最初に立ち上がってきたのが、当時あまり触れられていなかった不登校の子どもたちのことでした。不登校の経験があったのでということでしたが、東京にあるフリースクールの校長先生をお呼びして、不登校の人たちに集まってもらって、直接お話を交わしてもらおう、ということがしたいと。そのときテレビの取材も入ったんですけども、顔は撮らないでとお願いして、そういうのを全部塾生が段取りしたんですね。そうして2年間の塾が終わった後、今度はその東京のフリースクールで学んでいる子どもたちが弘前に来て、ねふた制作をしたい、運行もしたい、ということになりました。3泊4日で

来られて、ねぶた団体の人たちに協力していただいて、制作をする。運行についても警察の許可を取って、一大小学校のところから、市民会館まで運行しました。いろいろな人たちが協力すればできるんですね。それはフリースクールの子どもたちが自主的にこういうことをやりたい、ということに対して地域のいろいろな人たちが実現へ向けて努力した。そういうところにいろいろな学びがあるし、それから先、またいろいろな世界が見えてくるというのがあったんで、子どもたちが興味を持ったものには何かしら私たちがお手伝いをして、実現させてあげられるような、そういう環境を整えていけるとよいなというような思いをしました。四半世紀も経った話ですけど。

○教育長（吉田 健）

25年前の頃からのお話ということですがけれども、主体性というのは後に予想もしないような大きな仕事をやる原動力になるものですし、いろいろなことに関わっていく可能性でもあります。その主体性を引き出す方向として、体験活動の充実というのが、今まさに教育に求められている、そう改めて思いました。

○市長（櫻田 宏）

今後も教育委員会の中でも議論していただいて、また市長部局においては予算面について考えていかないといけない。移動手段などのこともいろいろとありますし、身近なものから、仕組みにしていくと。多様性がある中から、いろいろなものがまた生まれていくということになっていけばなというふうに思います。

皆さんの想いは尽きることがないとは存じますが、残念ながら時間となりましたので、本日の会議はここまでとさせていただきます、次回また、いろいろなことについてお話をさせていただいて、子どもたちが健やかに成長していくように、伸び伸びと、生き生きと育つような環境づくりにつなげていければなと思っております。

本日はお忙しい中、本当にありがとうございました。

午後4時8分 閉会